

# 1. 令和6年度の活動

## (1) 令和6年度の全体スケジュール

	取組内容①	取組内容②	取組内容③	取組内容④
	プログラム検討委員会 ／検証評価委員会	企業/専門学校アンケート調査準備・実施	プレ実証授業準備・実施	事業報告と成果物 PR
9月	～事業開始～			
10月	10/24(木)第1回プログラム検討委員会 事業概要・目的周知 IT分野動向等共有 アンケート調査項目決定 年間スケジュール確認	アンケート項目洗い出し 項目決定 アンケート発送	プレ実証授業カリキュラム 案作成・決定 授業アンケート作成 教材制作	
11月		アンケート回収〆切 アンケート集計・分析		
12月	12/20(金)第2回プログラム検討委員会 アンケート調査結果報告と分析、課題・ニーズの整理 プレ実証講座カリキュラム案作成	アンケート集計・分析 アンケート結果報告書完成	↓	事業報告書作成や 成果物の作成・修正等。事業完了日までに進める。 PR動画は最終段階のため後日作成とります。
1月			プレ実証講座打合せ、リハーサル 教材修正、アンケート作成等	
2月	2/5(水)検証評価委員会 プレ実証講座の見学、評価、分析  2/13(木)第3回プログラム検討委員会 プレ実証講座の報告と分析、課題・ニーズの整理 次年度カリキュラムの検討等		2/5(水)プレ実証講座開催 実証講座、受講アンケート、確認テストの実施、各結果集計  ・プレ実証授業実施報告書作成 ・シラバスや指導書等修正	↓
3月	～初年度事業終了～			

(2) 令和6年度 of 取組内容

■ 取組内容①

・プログラム検討委員会／検証評価委員会

会議名①	プログラム検討委員会		
目的・役割	<p>事業運営の計画・実行・評価。 改善についての意見や助言してもらい事業内容を充実させる。 事業内容、目的について確認及び情報共有し、関係者間での意識のすり合わせを行う。</p>		
会議の具体的な内容	<p>①第1回委員会：10／24(木)開催</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・事務局より事業概要・目的説明を行い、IT 分野動向の情報共有、実施するアンケート調査項目について意見を聴取した。</li> </ul> <p>文系学生の取り込み方、AI のブラックボックス問題、中小企業のニーズ把握など。より実践的で効果的な人材育成プログラムの開発を目指して行くことを確認した。</p> <p>②第2回委員会：12／20(金)開催</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・企業アンケート、専門学校アンケートそれぞれの調査結果報告を行い、開発カリキュラムの方向性について意見を聴取した。</li> <li>・プレ実証講座カリキュラム案について意見を聴取した。</li> </ul> <p>企業が専門学校生に求めるスキルと専門学校も教育内容にギャップが生じている。学校のカリキュラムと企業の期待を整理し、どのような知識・スキルが求められているかを明確する必要がある。</p> <p>③第3回委員会： 2／13(木)開催</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・プレ実証講座の報告</li> <li>・次年度開発プログラムについて 報告と意見聴取。</li> </ul> <p>楽しく学べる環境づくりとビジネスにおける AI 活用の実践的アプローチの重要性が強調された。</p>		
委員数	17 人	開催頻度	年3回

会議名②	検証評価委員会		
目的・役割	開発したプログラムの実証講座の見学、受講アンケート分析、受講状況、受講の有用性等を評価・分析するために構成する。		
検討の 具体的内容	<p>◆検証評価委員会: 2/5(水)開催</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・プレ実証講座「AI・プログラミング体験」について、アンケート・確認テストの結果確認・分析、委員評価等意見聴取。</li> </ul> <p>[プレ実証講座評価]</p> <p>○AI体験 授業の構成(座学・実習・グループワーク)のバランスについて、全体的に適切であったという評価が多かったが、実習時間をもう少し延ばすべきだという意見も出された。</p> <p>○プログラミング体験 学生の興味を引き出すために楽しく実践的な内容にし、AIと関連づけながらプログラミングを紹介する方法や、医療事務などの専門分野に特化したテーマ設定の有効性について合意した。</p>		
委員数	6人	開催頻度	年1回

## ■取組内容②

### ・企業/専門学校アンケート調査準備・実施

#### ○事業を実施する上で実施した調査①

調 査 名 ①	AI、IoT 等の成長分野技術導入ニーズアンケート及び専門学生に求める IT 系必要スキルアンケート調査【企業編】
調 査 目 的	成長分野技術の導入・活用状況や現場で求めるスキルの程度、専門学生に求める IT 系スキル、及びスキル習得した学生の人材確保と活用について調査を行い、現場の課題、求める IT 人材・スキル、成長分野技術の導入状況、緊要度、活用事例について明らかにする。
調 査 対 象	広島県及び岡山県の企業名簿より、無作為に 300 社の事業所
調 査 手 法	郵送及び Web (Google フォーム) による配布及び回収
調 査 項 目	企業概要、専門学校生の採用状況、IT・情報システム部署の状況、専門学校への要望、望む人材
分 析 内 容 (集計項目)	現場で求められる IT 人材やスキル、成長分野技術の導入状況や必要度、専門学生に求める IT 系必要スキル。 企業概要／専門学校生の採用実績・メリット／IT 関連分野に特化した人材の採用／IT・情報システム部署の体制や AI 活用状況等／専門学校で身につけておいてほしいスキル等要望／望む先端技術人材のレベル等
調 査 結 果	<p>【企業属性】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・業種: 製造業が大半を占め、次に小売業、卸売業が続いた。</li> <li>・従業員規模: 50 人～200 人規模の企業が最も多かった。</li> <li>・IT 部署: IT 部署を持たない企業や、少人数の部署で対応している企業が多数を占めた。</li> <li>・IT 活用状況: 生産管理、在庫管理、仕入・売上管理など、基幹業務への IT 活用が進んでおり、AI やビッグデータの活用は一部の企業に限られていた。</li> </ul> <p>【企業の現状と課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・IT 人材不足: 半数以上の企業が IT 人材の不足を訴え、特に AI 関連の専門知識を持つ人材の不足が深刻である。</li> <li>・IT システムの外部委託: IT システムの多くを外部に委託しており、自社内での開発・運用体制が整っていない企業が多い。</li> <li>・AI 導入の遅れ: AI の導入は進んでおらず、導入している企業であっても、その活用範囲は限定的である。</li> </ul> <p>【IT 人材に対するニーズ】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・即戦力: 専門知識を習得し、短期間で現場に貢献できる人材が求められている。</li> </ul>

	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ITリテラシー: IT や AI の基本的な知識を持ち、幅広くIT 推進できる人材が求められている。</li> <li>・ビジネススキル: コミュニケーション能力、問題解決能力、チームワークなど、ビジネス全般で求められるスキルに加え、データ分析能力やプロジェクト管理能力も重要視されている。</li> <li>・AI 活用: AI ツールを使いこなせる人材や、AI の基礎的な知識を持つ人材へのニーズが高まっている。</li> </ul> <p>【専門学校への期待】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・実践的なスキル: プログラミング、データベース設計・管理、ネットワーク構築・管理などの実践的なスキル習得を期待している。</li> <li>・AI に関する知識: AI、ビッグデータ、IoT などの基礎知識と、それらを活用できる能力の育成を期待している。</li> <li>・ビジネススキル: コミュニケーション能力、問題解決能力、プロジェクト管理能力など、ビジネスで求められるスキルの習得を期待している。</li> <li>・企業との連携: インターンシップや共同開発など、企業との連携を通じて実践的な経験を積める機会を求めている。</li> </ul> <p>【専門学校への提言】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・本調査の結果から、専門学校には以下のことが求められる。</li> <li>・実践的な教育: 企業が求める即戦力育成のため、実務に即したカリキュラムの開発が求められる。</li> <li>・AI・データサイエンス教育の強化: AI やデータサイエンス分野の教育を強化し、企業のニーズに対応できる人材を育成する必要がある。</li> <li>・産学連携の強化: 企業との連携を深め、インターンシップや共同研究などを通じて、学生の実務能力を高めることが重要である。</li> <li>・コミュニケーション能力の育成: プレゼンテーション能力やチームワーク能力など、社会人として必要なコミュニケーション能力の育成に力を入れる必要がある。</li> </ul> <p>※調査結果詳細は、「AI、IoT 等の成長分野技術導入ニーズアンケート及び専門学生に求める IT 系必要スキルアンケート調査報告書【企業編】」を参照</p>
<p>構築しようとしているモデルの検討にどのよう に反映させるか (活用手法)</p>	<p>現場で求められる IT 人材やスキル、成長分野技術の導入状況や必要度を調査することで、不足する IT 人材を補うことのできる人材育成へと繋げられるモデルカリキュラムの開発に反映させる。</p>

○事業を実施する上で実施した調査②

<p>調 査 名 ②</p>	<p>IT系学科導入アンケート調査【専門学校編】</p>
<p>調 査 目 的</p>	<p>既存の専門学校における理系学科(特にIT関連)への転換・新設意向を把握し、その現状と課題を明らかにする。</p>
<p>調 査 対 象</p>	<p>情報処理、デザイン、ビジネス、医療事務、美容、ファッション系等いずれかの学科を設置する専門学校について次の地域から100校 (中四国46校、京阪神40校、中部東海14校)</p>
<p>調 査 手 法</p>	<p>郵送及びWeb(Googleフォーム)による配布及び回収</p>
<p>調 査 項 目</p>	<p>基本情報、設置学科状況、IT・AI関連学科を想定した教育内容・カリキュラムの意向や教育支援の状況、学生募集活動状況、就職活動状況等</p>
<p>分 析 内 容 (集計項目)</p>	<p>専門学校の理系学科や成長分野技術の導入状況、転換・新設の意向。 基本情報／学科状況／先端技術関連カリキュラムの優先度・課題／生成AIの取扱／AI関連の教育支援やインターンシップの課題／募集活動／就職活動状況 等</p>
<p>調 査 結 果</p>	<p><b>【IT分野への関心】</b> 多くの学校がAI、データ分析、IoTなどの先端技術分野に強い関心を示しており、これらを学ぶカリキュラムを導入したいと考えている学校が多かった。特に生成AIやデータ活用は企業のニーズとも合致し、今後の重点分野となることが期待される。</p> <p><b>【理系学科への転換・新設】</b> 一部の学校ではIT関連学科の新設や既存学科の転換を検討しているものの、導入のハードルとして「教員の専門知識不足」が共通課題となっている。また、ネットワークシステム分野では「予算の制約」、AI分野では「学生の基礎知識・準備不足」の割合が高く、それぞれの分野ごとに異なる課題も指摘された。</p> <p><b>【学生募集】</b> 学生募集については、「学校の公式ウェブサイトやSNS」「オープンキャンパスでの実習体験」「パンフレット配布」が主要な方法として継続されていることが分かった。入学者減少傾向にある学校は従来の手法に依存する傾向が強いが、減少が見られない学校ではオンライン広告やデジタル施策を取り入れる動きが確認された。</p> <p><b>【学生の不安と就職活動】</b> 学生側の不安として、「学習の難易度」「将来の就職先の不透明さ」が挙げられている。また、就職活動に関しては「地元企業」での就職希望が多く、インターンシップや実習先からの採用を期待する声もあった。</p>

	<p><b>【課題】</b>  すべての分野で最も多く挙げられた課題は資格を持つ教員の不足であり、専門的な IT 教育を担う人材の育成や確保が急務であることが示された。また、ハード面では「必要な設備やリソースの不足」、ソフト面では「カリキュラムの柔軟性」や「教育環境の整備不足」も課題として挙げられた。これに加え、IT 技術は急速に進化しており、最新技術に対応する体制が整っていない点も懸念材料となっている。</p> <p>※調査結果詳細は、「IT 系学科導入アンケート調査報告書【専門学校編】」を参照</p>
<p>構築しようとしているモデルの検討にどのよう  に反映させるか  (活用手法)</p>	<p>専門学校の理系学科や成長分野技術の導入状況、転換・新設の意向等を調査することで課題を抽出し、今後理系学科への新設等を支援する取組、モデルカリキュラムの開発へ活かす。</p>

### ■取組内容③

#### ・ブレ実証授業準備・実施

#### ○開発に際して実施した実証講座の概要

実証講座の対象者	主に IT 系学科以外の専門学校生 穴吹ビジネス専門学校 医療事務・クラーク学科 1 年生
期間 (日数・コマ数)	1 日・3 時間(90 分×2 コマ)
実施手法	<p>「AI・プログラミング体験」(座学、実習)</p> <p>【1コマ目】</p> <p>1. AI の概要(座学・実習 90 分)</p> <p>○AI とは何か、どのように活用されているのかを解説。</p> <p>○実習(体験)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・Google teachable machine(画像認識 機械学習)</li> <li>・Quick, Draw(AI によるイラスト識別)、Gamma(プレゼン資料生成)、ChatGPT</li> <li>・医療分野での AI 活用事例を紹介</li> </ul> <p>○グループワーク</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・受講生同士で AI の活用方法を考え、意見交換を行う。</li> <li>・医療事務に関連したテーマ、目的等をグループワークにて話し合う。</li> <li>・テーマに沿ったアイデア出し、資料作成において生成 AI を利用する。</li> <li>・AI の課題</li> </ul> <p>【2コマ目】</p> <p>2. プログラミング体験(実習 90 分)</p> <p>○簡単なプログラムを入力、実行することで、その基本的な考え方を理解する。</p> <p>○初歩的な命令文( print, input, for)、変数、繰り返し処理、累計計算の考え方を理解する。</p>
実証結果	<p>1. AI の概要</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・満足度や理解について:ポジティブな意見が 100%</li> <li>・生成 AI を学習や将来の仕事で活用できるイメージが持てたか: 「具体的に持てた・ある程度持てた」が 93% 「なんとなくイメージしたが具体的な活用方法は不明」が 7%</li> </ul> <p>2. プログラミング体験</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ポジティブな意見が 85%以上であったが、AI と比較すると活用イメージがつきにくい意見が増えた。</li> </ul> <p>※受講アンケート結果詳細はブレ実証講座実施報告書を参照</p>
受講者数	14人



## ○開発したモデルの検証

### ■開発モデル:「AI・プログラミング体験」

#### ■アンケートをもとにした検証

##### ①受講者からの評価

- ・受講アンケート
- ・確認テスト結果

##### ②講師・教員からの評価

- ・評価アンケート
- ・講師コメント

##### ③検証評価委員からの評価

- ・評価アンケート
- ・受講者評価、検証評価委員評価をふまえての総合評価

#### ■評価

上記①は、各結果詳細参照。

②・③は以下参照。

#### ○検証評価委員によるプレ実証講座の評価アンケート結果

講師、検証評価委員によるプレ実証講座 評価	回答数
<b>1. 講座の構成(座学+実習+グループワーク)は適切でしたか？</b>	
A. バランスが良く、分かりやすかった	1
B. ほぼ適切だったが、もう少し実習の時間がほしかった	8
C. 普通だった	
D. 理論ばかりで実践が少なかった	
E. ついていけず、難しかった	
<b>2. 文系学生の AI・IT に対する興味を引き出せたと感じましたか？</b>	
A. 受講者が積極的に学び、興味を示していた	1
B. 概ね興味を持っていた	7
C. 普通だった	1
D. 難しそうにしていた受講者が多かった	
E. 受講者の興味を引き出せたとは思えなかった	
<b>3. 生成 AI を活用したグループワークの効果は高かったと感じましたか？</b>	
A. 受講者の理解を深める良い機会になった	2
B. 概ね良い影響があった	4
C. 普通だった	2
D. あまり活発な議論にならなかった	1
E. 効果が低かった	

講師、検証評価委員によるプレ実証講座 評価	回答数
<b>4 受講者の学習意欲を引き出せる内容だったと感じましたか？</b>	
A. 受講者が積極的に取り組んでいた	1
B. 概ね関心を持っていた	6
C. 普通だった	2
D. 興味を持ちにくい内容だった	
E. 受講者の学習意欲をあまり引き出せなかった	
<b>5 今後、プログラムを改善するために必要な点は何だと感じますか？ 複数回答可</b>	
A. もっと実践的な課題を増やす	
B. 講座内容の難易度を調整する	2
C. グループワークの進め方を工夫する	6
D. 生成 AI の活用方法をより詳しく説明する	2
E. 講座導入部分での実習時間を増やして、受講者興味を拓げる	5
<b>6 今回のプレ実証講座 3 時間をとおして、どのように感じましたか？</b>	
A. 良い。継続し、さらに発展させるべきだと感じた	2
B. 概ね良いが、一部改善が必要	6
C. 妥当	
D. 見直しが必要	1
E. 大幅な見直しが必要	
<b>7 文系学生向けの AI、プログラミングコースの講義内容は有用であったか？</b>	
A. 有用であった	1
B. 概ね有用であった	7
C. 妥当	1
D. あまり有用でなかった	
E. 有用ではなかった	

## <プレ実証講座の様子>



Google teachable machine を  
使用した画像認識体験



生成 AI Gamma を使用した  
プレゼン資料作成と発表



Python を使用した  
プログラミング体験

## <グループワークでのワークシートまとめ>

実証講座 1限目 グループワーク (下記内容について、グループで必要な項目について話し合い、資料作成する)

医療事務に関連する病院や施設内の仕事に必要なことをについて、  
生成AIに手伝ってもらって掲示物やマニュアルなどを作成

グループ名	キラキラユニコーン	1班	もさく	2班
グループ人数	4	4	3	3
何を作る?	クレーム対応マニュアル	外国の方向けの受付案内	高齢者向けの予防接種啓発ポスター	予約システムの採用を周知する院内掲示のポスター
なぜそれを作る?	待ち時間の長さからクレームが来る	病院を訪れる外国の方が増えてきたから	高齢者に分かりやすく	予約システムのことを患者さんに知ってもらうため
誰を対象にする?	来院された患者様	外国人患者や、対応する移譲事務	高齢者や身体障害者	患者さん
どこに(で)使おうとしている?	医療機関(クリニック・病院)の受付	受付窓口	医療機関	院内の目につくところ
なぜそれは必要だと思ったか?	クレーム対応の経験がないため実習前に知っておきたいと思ったから	受付で言葉がわからない外国の方が診察に来た時に、正確にムズな案内ができないことがあるから	分かりやすく伝えるため	患者さんに予約システムについて周知するため
生成AIに何を手伝ってもらったか?	病院におけるクレーム対応マニュアルをわかりやすく簡潔に考えてもらった	プレゼンテーションの作成、受付案内文章の作成、翻訳	スライドの作成、文章	案を出してもらった
どんな工夫をしたのか?	実際の例を用いてポイントなどをまとめた また、海外の患者様にもスポットを当て、対応例を考えた	みんながわかりやすい共通言語である英語で作成した まずは日本語で作成し自分たちが読んでわかりやすいことを確認したうえで英語に翻訳したこと	ポスターの見やすさなど	分かりやすく患者さんに伝わるように工夫した

## <作成プレゼン資料一部紹介>



「病院におけるクレーム対応マニュアル」



「外国人の方向け受付案内」

## ○プレ実証講座講師コメント

### 【所感】

明るく積極的な学生が多く、前向きに取り組んでくれたおかげで、講座は行いやすかった。内容についても助言をいただいたおかげで、学生にとって取り組みやすい教材になった。

### 【良かった点】

1時間ごとに実習やグループワークなど座学以外のことが取り入れられ、学生に飽きる暇を与えなかったところは、授業構成としては、とても良かった。概ね楽しかったとの受講生からの評価も多くあった。体験という意味では、有意義な2コマであった。

### 【改善点】

- ・実習の時間やグループワークの時間をもう少し増やせる工夫が必要だと感じた。特にグループワークとエラー時のデバッグ、for 文での繰返しの累計処理などは、もう少し時間をとること、そして説明の方法を研究する必要がある。
- ・後半のプログラム体験は、あと 30 分ぐらい時間が必要であった。
- ・プログラムのデバッグがうまくいかない時、周りの受講生などいろいろな人に助けってもらって、デバッグもできたという感想をもたせられるぐらい時間的な余裕が欲しかった。
- ・グループワークの時間をもっと増やすべきだったと思う。その時には、もう少し丁寧なワークシートが必要だと感じた。

## ○検証評価委員会要約

### 要点

文系学生向けの AI プログラミング体験授業の構成について議論し、適切なバランスが取れていることを確認した。グループワークの重要性や、特定の学科の学生にとっての生成 AI 学習の価値が強調された。また、プログラミングの可能性を示すことや、専門分野に特化したテーマ設定の有効性についても合意に達した。

### AI 体験授業評価

授業の構成、特に座学、実習、グループワークのバランスについて、全体的に適切であったという評価が多かったが、実習時間をもう少し延ばすべきだという意見も出された。また医療事務・クラーク学科の学生にとって興味を引く内容であったことや、生成 AI の使い方についてのグループワークの重要性が指摘された。

### プログラミング体験評価

授業構成、グループワークの重要性、プログラミング導入の適切な方法について意見を交換し、学生の興味を引き出すために楽しく実践的な内容を提案し、プログラミングの可能性を示すことの重要性を強調した。AI と関連づけながらプログラミングを紹介する方法や、医療事務などの専門分野に特化したテーマ設定の有効性について合意した。

## ○検証評価委員会での意見

### 評価できる点

- ・実証講座全体としては、大変良い授業であった。特に楽しそうに講座を受講していた。その意味においては、大変成功であった。
- ・導入部分は興味を引く内容で、医療事務・医学系の学生にも適していた。
- ・講座の構成、流れは良かった。「AIの概要→活用事例→生成AIの使用→医療事務分野への利用→グループワーク」
- ・日常生活から、受講者の学んでいる医療事務その職業分野にシフトしていくという展開は非常に良かった。全く知らない人が興味を持つ。良い手順になっていた。
- ・受講生が日常生活でAIをどのように活用できるかを考えられる内容だった。
- ・グループワークのテーマについて、受講した医療事務を勉強されている学生にフォーカスしたテーマになっていた。
- ・医療事務でどう生成AIを使うか、イメージできるような教材で工夫されていた。

### 検討・改善点

- 「AIの概要」(1コマ目)
  - ・もう少し実習の時間があつた方が良い。
  - ・実際に生成AIに触れるワークをもう少し増やすことで、より利用のイメージを持ってもらう。
  - ・機械学習の利用例(画像判別)、生成AIの利用例をいくつか示して、進行すると良い。
  - ・実習よりはグループワークの時間が多い方が良い。  
グループワークをすることで、「あの人がこういうふうに使っている」など、他の人の使い方を見て気づきを得ることができ、人の使い方を見て学ぶ機会を、グループワークを多く入れることで、より多くの学習成果を効果的に得られるため。
  - ・グループワークについて、少し議論が活発になってなかったように見えた。  
席の配置を向かい合わせの配置にした方が良い。最初から対面の配置にすれば、もう少しグループワークの対話も生まれる。グループワークは検討手順を明確に伝える
  - ・受講する人によって、どういったことに使えるかという知識量はかなり違うところから講座を展開・開始することも想定した方がいい。
  - ・座学の時に、AIの分類よりも、こういうことに使われている、のようなざっくりとした例示を示した方が、具体的にこういうことでも使われている。という興味につながる。興味を引くためのコンテンツの選び、工夫が必要である。
  - ・今回の講座が、特別講座として1回限りの講座だから楽しいのか、連続するとどうなっていくのか。といところが少し気になる

### ●「プログラミング体験」(2コマ目)

- ・1時間目の「AIの概要」と2時間目の「プログラミング」についての関係性を説明する必要がある。
- ・プログラミングのところは、受講生にとっては、きつい、難しいと感じた。
- ・一番気になるのは、1時間目の部と2時間目の部の落差。2時間目のプログラミング、こんなに面倒だったら止めておこうかな、にならないか、という懸念。
- ・プログラミングの部分の難易度を易しい方向に調整する必要がある。
- ・学習内容からすればプログラミング実習時間はあと30分ぐらい時間が必要だった
- ・目的を「プログラミングの基礎理解」ではなく「プログラムでできることを知る」に変更することで、受講生の興味を持続させる。

### ■今後のステップ・結果の活用

- ・AIとビッグデータ、IoTの活用方法をより具体的に検討し、学習後の出口の姿を明確にする。
- ・事務系の学生向けに、AIツールやローコードツールの活用スキルを身につけるカリキュラムを検討する。
- ・マイクロソフト製品(Power Automate等)やエクセルの高度な分析機能を活用した教育プログラムの可能性を探る。
- ・医療系や旅行業などの特定分野のデータを用いた、AIを活用したデータ分析演習の内容を検討する。

## ■取組内容④

### ・事業報告と成果物 PR

#### ○事業実施に伴うアウトプット(成果物)

##### ①企業アンケート調査・報告書

企業の求める IT 人材・スキル、最先端 IT スキルの導入状況、必要度等

##### ②専門学校アンケート調査・報告書

理系学科への転換・新設の検討度、その際の懸念事項、理系教員の配置状況、カリキュラム調査、企業連携実習状況等

##### ③プレ実証講座カリキュラム等一式

まずは興味をもってもらう位置づけ(入門編)としての AI・プログラミング体験。

- ・教材資料
- ・シラバス、コマシラバス
- ・教員用学習指導書

##### ④プレ実証講座報告書

##### ⑤事業報告書

当年度の実施内容をすべてまとめ、専門学校等へ送付し事業普及へ活かす。

##### ⑥Web サイトでの活動報告

事業内容、各種報告書等すべて Web 公開し、自由に閲覧できるようにする。

##### ⑦事業 PR 動画(後日)

実施内容等を PR 動画にまとめ、Web 公開することで取り組みの早期普及を図る。

○事業実施によって達成する成果及び測定指標

KPI(成果測定指標)		単位	事業開始前	令和6年度	令和7年度	令和8年度
【必須】取組の普及・展開を行った団体数	目標値	団体		30	30	50
	実績値	団体		-		
	達成度	%				
(上記 KPI の測定手法) Web サイトでの公開及び、報告書を近隣エリアの専門学校へ送付、令和8年度はさらにエリアを広げて実施報告を行う（※令和6年度実績は令和7年度に報告とする）						
KPI(成果測定指標)		単位	事業開始前	令和6年度	令和7年度	令和8年度
開発プログラムの内容を検証するために 行う実証講座の受講人数	目標値	人数		20	20	20
	実績値	人数		14		
	達成度	%		70		
(上記 KPI の測定手法)複数科目の実証講座を予定。 令和6年度(1月予定)、令和7年度(10月～1月頃)、令和8年度(10月～12月頃) 対象者はより多くの効果を測るため、学生を中心にその他社会人も想定する						
KPI(成果測定指標)		単位	事業開始前	令和6年度	令和7年度	令和8年度
実証講座受講者の満足度・理解度	目標値	%		70	70	80
	実績値	%		90		
	達成度	%		130		
(上記 KPI の測定手法) 講座終了後に受講者へアンケートを実施し、満足度や理解度を測定する。 最終的には全項目で80%以上を目指す						
KPI(成果測定指標)		単位	事業開始前	令和6年度	令和7年度	令和8年度
実証講座受講者の知識習得度	目標値	%		70	70	80
	実績値	%		53		
	達成度	%		76		
(上記 KPI の測定手法) 講座終了後に確認テストを行い、最終的には80点以上の正答となるよう指導方法や教材の改善を図る。						
KPI(成果測定指標)		単位	事業開始前	令和6年度	令和7年度	令和8年度
講師・教員等関係者による開発プログラムの評価	目標値	%		70	70	80
	実績値	%		79		
	達成度	%		113		
(上記 KPI の測定手法) 講座終了後に講師や教員、関係者へのアンケートを実施し、プログラムの教育効果について測定する。全項目で最終的には80%以上を目指す						